

コメ開放 決断の日

徹底検証

食管・農協・新政策

土門 剛
[著]



コメ開放 決断

徹底検証 食管・農協・新政策

土門 剛 〔著〕

著者略歴

土門 剛 (どもん・たけし)

1947年 大阪生まれ。

1970年 早稲田大学大学院法学研究科中退、
通信社記者を経て、

現在 農業評論家

著書 『よい農協』(日本経済新聞社、1988
年)、『農協が倒産する日』(東洋経済
新報社、1991年)ほか

コメ開放決断の日

1993年10月20日 1版1刷

著者 土 門 剛

© Takeshi Domon 1993

発行者 田 村 祥 蔵

発行所 日本経済新聞社

東京都千代田区大手町1-9-5 〒100-66

振替 東京 3-555 電話(03)3270-0251

印刷 ㈱ディグ／製本 トキワ製本所

ISBN 4-532-14242-3

本書の無断複写複製(コピー)は、特定の場
合を除き、著作者・出版社の権利侵害になります。

Printed in Japan

まえがき

一九九一年（平成三年）の暮れに『農協が倒産する日』（東洋経済新報社）を出版して以来、農業と農協を取り巻く環境は激動の連続だった。昨今の米の緊急輸入問題は、その象徴的な例である。一〇〇万トン以上の米の輸入を行えば、当然ながら、食糧制度の崩壊、減反政策の全面見直しと、ドミノ現象が起きてくる。

一方、農協金融では九二年春に住專問題が表面化した。住專（住宅金融専門会社）がバブル破綻の直撃を食らって経営危機に追い込まれ、そこに巨額の融資をしていた農協金融機関がトバッチリを受けたのだ。その焦げ付きは想像を絶する額で、農協金融の火薬庫となってしまった。それだけではない。都道府県信連や共済連などによる、債券や株の運用失敗も露呈してしまった。農協金融はやがて再編の動きを始めるだろう。

鉄の団結を誇った農協組織のタガも緩み始めた。農協組織の頂点に立つ全国農業協同組合連合会（全農）が格好の例だ。まず、九二年春の、富山県経済連による自主流通対策費の流用問題。次いで、その年の暮れに、全農系最大の米卸、東京パールライスが大量の米を不正に横流しし、その代金（二三億円）を焦げ付かせた事件が発覚。九三年三月には、全農が加工業者に

他用途米を売却する際に発生する差益金を生産者に返却していないことが、参議院農林水産委員会で共産党議員から指摘された。

農政に目を転じれば、九二年六月、農水省は今後の農業政策の指針ともなるべき「新しい食料・農業・農村政策の方向」（略称・新政策）を打ち出した。農村における高齢化の進行と深刻な人手不足が、新政策をまとめるきっかけとなったというのだ。だが、米の緊急輸入という非常事態のもとでは、せつかくの農政改革プランも色褪せてきた。政策の全面見直しは避けられないだろう。

本書は、輸入・食糧・減反、農協金融、新政策の三つのテーマを取り上げた。各テーマは、いずれも現地のルポを踏まえながら、自分なりの分析を加えたつもりである。一部記事は『週刊東洋経済』や『日経フィナンシャル』などに発表した記事に加筆した。米の緊急輸入という戦後農政の大転換点を目の前にして、二一世紀の食料政策、農業政策、農村政策、農協政策を考える材料を提供できたのではないかと思う。農村社会と農協界特有の構造的な問題を抉り出したかったが、筆者の能力が十分に及ばなかった。このテーマは、いずれ機会があれば取り上げることにはしたい。

一九九三年一〇月一日

土門 剛

目次

第1章 コメ輸入と食管・減反の崩壊

1	〔シミュレーション〕市場開放決断……………	10
---	-----------------------	----

緊急輸入で米市場混乱	14	／	難渋した国会対策	16	／
市場開放決断の日	19	／	手切れ金	20	

2	総論賛成、各論反対の制度改革……………	23
---	---------------------	----

期待外れの規制緩和	25	／	急がれる米市場の整備	28	
33	／	インパクトあつた買取制度	31	／	減反全面廃止

3	消えた自主流通対策費……………	35
---	-----------------	----

現職組合長の爆弾発言	36	／	「農家に告発されるぞ」	38
------------	----	---	-------------	----

／ 飼い犬に手を咬まれる 41／会計検査院が実態調査 43

4 交代した食管の主役……………47

農協組合長の追及 48／「株主代表訴訟か二三億円の
弁済か」 51／配分権は風前の灯 55

5 食糧庁の完敗に終わった大潟村問題……………58

三年間二万三〇〇〇円保証 60／カントリー公社が悲
鳴 63／食味値七五以上 67／運動から事業へ 68

第2章 農協金融解体のシナリオ

1 想像を絶する焦げ付き……………72

隠された二通の通達 74／ルール自体がおかしい 79
／すべては総選挙まで 83／解体へ向けてのシナリ

2 瀬戸際の農協金融……………90

信連の事実上の倒産 91 / 自分の農協は自分で守る 96

/ 心配される取り付け騒ぎ 98

3 挫折した農協合併……………103

予想外の不信任票 104 / Aリーグ、Bリーグに分裂

108 / 事実隠しで不信任を助長 110

4 合併効果を労組が食いつぶす……………113

スケール・メリットを生かせず 114 / 合併の途端に値

上げ 115 / ドロ沼化する労使紛争 118 / ヤル気出た

専業農家 120

5 借金問題はこれからが本番……………123

悪農口座が原因 123 / いきなりストップ 126 / 反抗

した農家を狙い打ち 128 / 風呂も重油から薪へ 130

6 農協利権に群がる幹部たち……………134

突然の機種変更 136 / 背景に熾烈な商戦 139 / チェ
ック機能なし 142

第3章 新政策と日本農業の将来

1 求人雑誌に農業が登場……………148

農業人口の激減にショック 150 / 隣の家に蔵が建てば
腹が立つ 156 / 農協にアメとムチ 160

2 農業は二一世紀のベンチャービジネス……………163

農業専門のコンサルタンツ・グループ 164 / 若者を呼
び戻す法人化 167 / 数々の法人化メリット 169

3 払拭できるか集落営農的発想……………173

小林芳雄さんの体験	175
農村社会全体の意識改革を	179
始まった優良農地の分捕り合戦	181
「五年でベンツに乗せてやる」	181
大規模農家とは喧嘩せず	185
入り小作農家に勝算あり	187
初期投資は四〇〇〇万円	190
日本版国営農場「鹿沼市農業公社」	193
鬼っ子的存在	194
高下駄式経営	197
民業への圧迫	198
ボタンかけ違った農協の法人化対応	202
農協王国でも法人化の動き	203
農協の営農方針と衝突	205
法人化で社会的信用	208
専門農協にもっと光を	210
総合農協対専門農協	211
マーケット重視の品質管理	

214／ 総合農協と同じ扱いを 217

8 消費者の舌に非関税障壁を……………220

予期せぬ反対運動 221／ 三つのジャンルに仕分け 223
／ お手本はラベル・ルー・ジュ制度 228／ 安い農産物
の輸入増大に対応 233

9 規制緩和が農山村を救う……………237

厚さ一センチの申請書類 238／ アルコール1%未満の
味 241／ 自助努力で解決する気構えを 243

(装丁 久保和正)

第1章

コメ輸入と食管・減反の崩壊

1 「シミュレーション」市場開放決断

九三年九月某日、総理官邸。細川首相と側近が打ち合わせ中だ。この日の打ち合わせは、同三〇日に正式発表される米の緊急輸入に関連して、年末にクライマックスを迎えるガット（貿易と関税一般協定）のウルグアイ・ラウンド（新多角的貿易交渉）の対処方針を決めておくためのものだ。

首相 「ウルグアイ・ラウンドはどういうスケジュールになっているのか」

側近 「はい、一二月一五日が交渉期限となっております。それに向けて一〇月一五日には最終交渉が予定され、一月一五日には最終合意案がまとめられることになっています」

首相 「その交渉期限とは、どういう意味なのか」

側近 「それはですね、米国政府の事情によるものでして、詳しく説明を致しますと、米国は建国以来、通商交渉でも州の権限が残っていて、通商交渉を行うには議会から交渉権限をもらう必要があります。その交渉権限が九三年一二月一五日までと、期間が決められていたのです。ウルグアイ・ラウンドは、米国とECとの確執がありまして、交

涉がズルズル延びていましたが、米国政府はその都度、議会にお願いをして、交渉期限を延期してもらっていました。ワシントンからの情報ですと、今回は延長されても短期間であるという見方が強まっています」

首相

「どうなるのかね」

側近

「そうになると、大変憂慮すべきことが起きかねない情勢です」

首相

「もつと詳しく説明をしてくれないか」

側近

「はい、米国議会に北米自由貿易協定（NAFTA）案を批准する動きがあります。協定案が批准されますと、米国は隣りのカナダやメキシコと、工業製品の分野は三年から五年、サービス分野は一五年かけて、ECのような単一市場を形成することになります」

首相

「当然、ECも対抗策を講じるだろうな」

側近

「その通りです。ウルグアイ・ラウンドにおけるECのポジションは非常に微妙なものがありまして、ECが域内における過剰農産物を補助金を使って世界に捌いています。が、こんなやり方では農産物貿易に依存している途上国に大変迷惑をかけると批判が高まっています。そこで、各国はECに対して農業補助金を大幅に削減するよう求め、昨年一二月にはその方向で一応合意ができていましたが、最近になってECは、多角

的通商交渉の枠組みにこだわりませんよ、というポーズを取り始めました」

首相 「ECだけでやっていきますよということだな」

側近 「はい、その通りです」

首相 「あらためて聞いておくが、自民党政権下での交渉スタンスはどうだったのか」

側近 「交渉当事者からヒヤリングをしたら、米国とECが確執を続けていることを奇貨として、土俵の下ですっと傍観をしていたということですね」

首相 「サボタージュだったのだね」

側近 「それに近い線です」

首相 「米国が、NAFTAで近隣諸国とやっていく、あるいはECも域内だけでやっていくとなれば、自由貿易の枠組みが崩れる。それだけは絶対に防がなければならないことだ」

側近 「自由貿易の枠組みが崩れたら、例えば、米国は日本製品に対しダンピング提訴を連発してくる恐れがあります。それが認められるような事態になりますと、まず鉄鋼製品の輸出が難しくなり、自動車やエレクトロニクス製品にも波及するでしょう。議会も挑発されて、どんどんターゲットを広げてきます。大統領も抑えきれなくなり、日米協調で貿易不均衡を是正するということせっかくの合意も水泡に帰す恐れが十分にありま

すね」

首相 「それじゃ、日本経済はどうなるんだ」

側近 「ウルグアイ・ラウンドが吹っ飛びますと、日本企業の株は売られるでしょう。株価が暴落しますと、金融機関が持っている株の含み益が減ります。そうなれば、銀行が貸し渋り、景気全体に悪影響を与えることは確実です。そんなシミュレーションもエコノミストの間で出始めています」

首相 「困ったことになったな。経済のブロック化を防ぐためにも、米の関税化という国内的には極めて難しい話をまとめて、早急にウルグアイ・ラウンドの土俵に上がることにしよう。関係部局に指示しておいてくれ」

九月三〇日、関係七閣僚による冷害対策閣僚懇談会が開かれ、米の緊急輸入を年内に実施することを発表した。具体的な輸入量は、年末に需要量が増える加工原料米を年内に二〇万トン輸入するというものだった。主食用についても、輸入先の調査など具体的な手続きに入った。

ただし、同日午後の記者会見で、ウルグアイ・ラウンドとの関連を記者から尋ねられた畑農相は、「緊急特例的な措置であり、ウルグアイ・ラウンドで論議されている貿易ルールの問題とはまったく次元を異にする」と説明した。首相の認識とはかけ離れたものだったが、これはウルグアイ・ラウンドの交渉を意識してのものだった。

緊急輸入で米市場混乱

お盆が過ぎたころ、食糧庁企画室を中心に緊急輸入を想定した作業が秘かに始まっていた。企画課の仕事は、様々な調査をベースに輸入数量や価格、それに売却価格など基本的なことを決めることだった。輸入量の判断は作況をみながらの作業だった。食糧庁の試算では、作況指数が八五で一五〇万トン、八〇で二〇〇万トン、七五で二五〇万トンの不足ということになる。九四年産米を早目に流通に回しても五〇万トン程度。それを差し引いても、九月三〇日時点の作況指数は八〇で最低一五〇万トンは緊急輸入しなければならない。

実際の輸入業務は輸入課が担当する。加工用あるいは業務用を最初に輸入、次いで主食用という順番だ。輸入量、輸入先、輸入方法、割当先とその量が作業のテーマだ。加工業界はもちろんのこと、外食や給食業界の需要動向はすでに調べてあった。

食糧庁幹部に輸入の探りを入れる総合商社の関係者も増えてきた。食糧庁首脳は「安い米が少々高くなっても、外食屋が困ったぐらいじゃ、輸入はしないよ。輸入するんなら、三回も反対決議した先生方が決断する問題だね。我々が率先して輸入することを話す必要はない」と言い放った。また、ある幹部は「安い米がなくて外食が困っているのなら弁当に入れる御飯の量を減らしたらいいいんだ」とすごい剣幕だった。需給失敗のイライラが隠せないのだろうか、発言もきわどい。